ISSN 0388-4732

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第 33 巻　第 3 号

赤兎山からの白山

石川県と福井県の県境に位置する赤兎山（あかうさぎやま）（標高 1,629m）は、ブナ林や湿地があり、約 1 時間半の比較的短時間で登ることができ、白山などの展望のよいことで知られています。山頂からは、右から三ノ峰、別山、白山が見え、白山は右から最高峰の御前峰、大汝峰、七倉山、四塚山の順に並んでいます。以前は静かな山でしたが、近年、特に週末は大変込み合う人気のある山で、地元の石川県や福井県のみならず、関西方面からの登山者が急増しています。山頂から東方に約 15 分のところに避難小屋があるので、宿泊のできる装備の用意をして夕方までに小屋に着くように行き、翌朝に日の出を拝んで下山するという方法をとると、静かな山歩きができるでしょう。　（上馬　康生）

ジョロウグモは白山に登れるか

徳本　洋

写真１　ジョロウグモ雌成体

2005 年秋、金沢市域ではジョロウグモ（写真 1）が、かつてないほどに増えました。「今年はうちの庭に大きなクモが多くて困っている」という声をよく耳にしましたし、「どうしてこんなに多くなったのか？」という質問は多く、温暖化のせいか、という人もありました。みなさんの所はどうだったでしょうか。ジョロウグモはわが国では本州以南の地域のほとんど、特に平野部や里山域ではどこにでも普通に見られるかなり大型のクモです。

体は黄色と黒を基本とした目立つ色合いですし、大きな丸い網を垂直に張ります（写真１）。しかも網を張るクモの多くは春、夏に親になるのに、ジョロウグモは秋に親になるのですから、この季節にはとても目につきます。その上、個体数がめっぽう多いものですから、このクモはまさに秋のクモの女王です。また、石川県でこのクモがまったくいない行政区域を旧の市町村名単位で探すと白峰村（現在の白山市白峰）だけです。そこで、このごろ話題になることの多い将来の気候変動がもし起これば、このクモが旧白峰村域内に進出し、さらに白山（国立公園）にまで達する可能性はあるのだろうか、ということを少し考えてみることにしましょう。

ジョロウグモは増えつつあるのか

金沢地区には全国でも数少ない、市街地のジョロウグモ個体数変動を示す 28 年間の記録があります（図 1）。これは金沢市緑が丘という町で毎年 10 月 15 日に、この町の中の道路をくまなく歩いて道路の外側約 5m以内に見えるジョロウグモを数えた記録です。こういう調査法をライン・センサスといいます。方法は簡単ですが、長年続けているとこのように思いがけない大きな変動があることがわかってきました。

紙面の都合で省略しますが、この緑が丘でのジョロウグモ個体数の年変動は、金沢市街地全域のジョロウグモの年変動を代表するとみなしてよいことが別の調査から判明しています。そして、その図を見ると、金沢地区ではここ 20 年間に限れば増減はありますが、明らかに増えてきているわけです。しかし、ずっとこの調子が続くのかとなるとそれはまったくわからず、今後の経過を見守るよりほかありません。

ただ、この図のような大きな個体数変動の波があるとなると、何が原因で？と誰でも思います。気候変動、餌（えさ）昆虫の増減、街の樹木数など緑の変化など、関係しそうな物事をさまざま検討しても

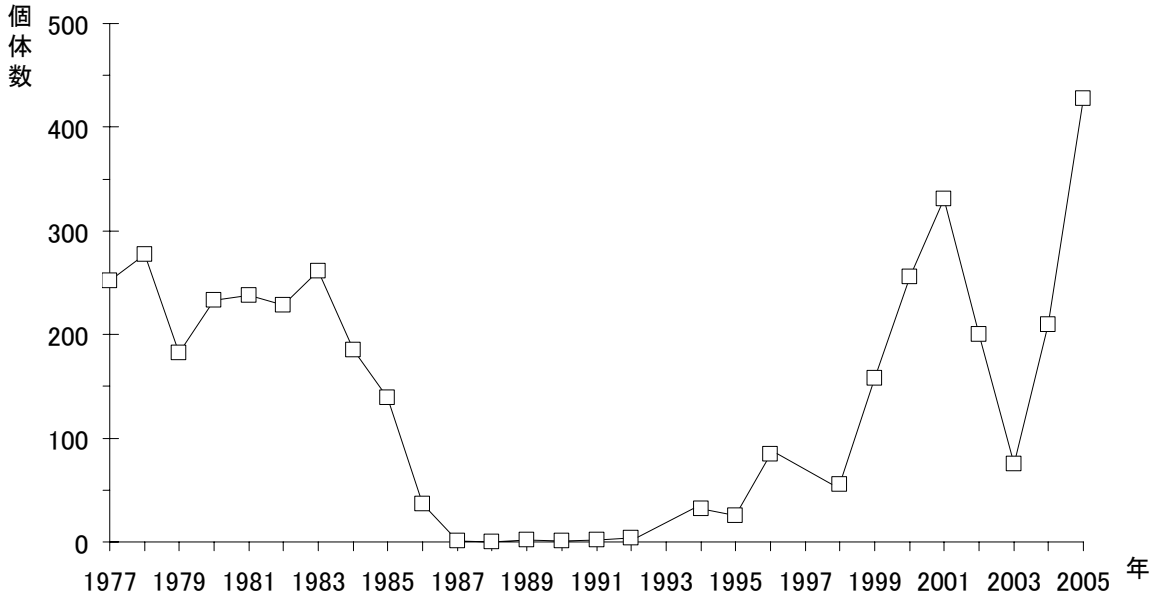


図１　金沢市緑が丘でのジョロウグモ雌成体の個体数年変動の推移

この変動に結びつきそうにないものが多くあります。そして、どこの市街地でも同じですが、大きなコンクリートの建物がつぎつぎと空地を埋めて増え、街の緑は年々減りつづけ、かつては秋の町内の街路を多数飛び交った赤トンボも今はまったく見られません。しかし、それでもジョロウグモは近年、どんどん増えてきているのです。

そこへもってきて千葉県の山地にある東京大学の演習林でもジョロウグモ個体数に周期的年次変動があることがわかってきました。そこでの変動周期は金沢市街地のものと明らかに異なっていますが、その変動の原因もまったくわからないのです。イワシやイカなど水産動物にも原因不明の漁獲量の大きな年変動があることは古くからよく知られています。調査が困難なだけで、個体数の周期的変動は動物ではかなり多いのでないかと思われます。しかし、その原因がわかっているものはきわめてわずかしかありません。ですから金沢でのジョロウグモ個体数の変動も短期の動きだけを見て安易に何かと結びつけて速断することには慎重にならざるをえません。周期的変動の一部をみているだけかもしれないからです。

ジョロウグモはどれくらいの標高まで生息できるのか

ではジョロウグモは現在石川県ではどんな範囲に生息しているのでしょうか。それを示したのが図２です。これは石川県全域をほぼ５km四方に刻んだメッシュで覆い、ジョロウグモが生息していることが確認されたメッシュの中には黒円を記入してあります。石川県の北半分の調査はまだ不十分なので省いてあります。この図を見ると白山国立公園内はもちろん、その近辺地域にはジョロウグモがいないことがわかります。また、この図からみて、地形的に標高の高い所にはこのクモは生息していないらしいと、どなたも一見して感じられることと思います。

そこで具体的にいくつかの山で、登山路に沿ってライン・センサスを行なった結果を図３に示してあります。調査した山は白山麓の手取川ダムの少し下手から始まって北の方に向かっていき、能登半島付け根部分にある宝達山までの山地です。この図からこのクモは平地や里山には多いが、標高 500m以上になると生息できにくくなることがおわかりになると思います。その理由はこのクモは温暖な気候帯を好むので、ある程度以上の標高になると好適温度以下に気温が下がり、生息しにくくなるためであろうと考えられています。

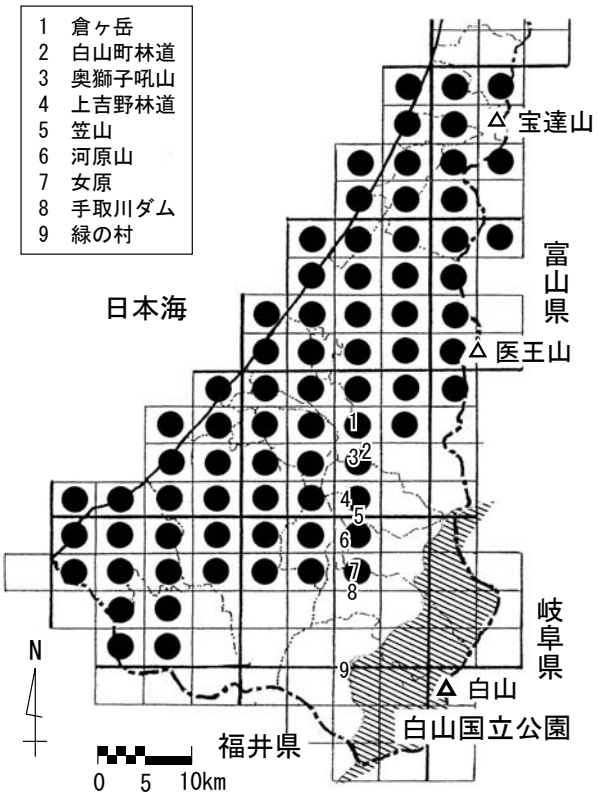


図２　石川県南半部分におけるジョロウグモの生息域メッシュ図

黒円記入メッシュがジョロウグモの生息域メッシュ。市町村区域線は 2005 年 2 月以前のものを使用

また、倉ヶ岳、医王山、宝達山のような平野部に隣接するような山では生息数がとても多いのですが、手取川が大きな谷となって山地の間を縫う区域(図 3 の右半分)になるとこのクモの生息密度がぐんと小さくなることに気付かれると思います。しかも分布上限は手取川の上流へいくほどに低くなっています。このことはおおまかにいって谷地形の奥の方はジョロウグモにとって棲みにくい環境であることを示していると思われます。この傾向は手取川のような大きな谷でなく、もっと小さな谷でもあちこちで見られます。ですから、医王山や倉ヶ岳で標高 500mを越す辺りまで生息できても標高 500m辺りまでの県内のどこでも分布できるということにはならないのです。もしそれが可能ならば、白山国立公園域の入口である白山市白峰の風嵐地区にある緑の村は標高 500mですから、ここまではジョロウグモがいてもよいことになります。しかし、旧白峰村の最低標高位置である手取川ダム湖の沿岸域へさえもこのクモは進出していないのです。現在、手取川流域でもっとも谷奥にジョロウグモが見られるのは旧尾口村（現白山市）の女原ですが、白山一里野温泉スキー場手前の尾添でもときどきみつかることがあります。

ところが、手取川ダムの堰堤が築かれている横にある展望台地（標高 460m；地籍は旧尾口村）で 1999 年 10 月に 3 個体（雌）を見たことがあります。その前にも後にも、ここでジョロウグモを見たのはこれ 1 回きりです。その年、ここで産卵したのかどうかもわかりません。しかし、このことはジョロウグモにとって厳しい環境であるはずの分布限界を越えた区域へ向かって、このクモはたえず分布域をひろめようと努力していることを示しています。クモは一般にごく小さい子グモのとき、タンポポの種子のように風に乗って分散する性質をもっていますので、あちこちに子グモは広がるのです。しかし、行きついた場所で成長し、繁殖することに成功できるか、どうかはまったくわかりません。それでもこの運を天にまかせた、拡散行動は毎年続けられているのです。これがいつの日か手取川ダムで定着、繁殖に成功するかどうか、若い方で気長に今後も毎年観察を続ける方が現れていただければうれしいです。

ジョロウグモが生息できる低温限界温度はいくらか

ジョロウグモが現在の分布上限より高い標高に進出しようとするとき、それを妨げている大きな要因は低温であろうということを前記しました。ではどれくらいの低温までならばジョロウグモが生息できるのでしょうか。それを知るひとつの目安は分布上限地点の温度です。それで図 3 の主な山の分布上限での気温を正確な月平均気温が判明している最寄りの観測地点との標高差をもとにし

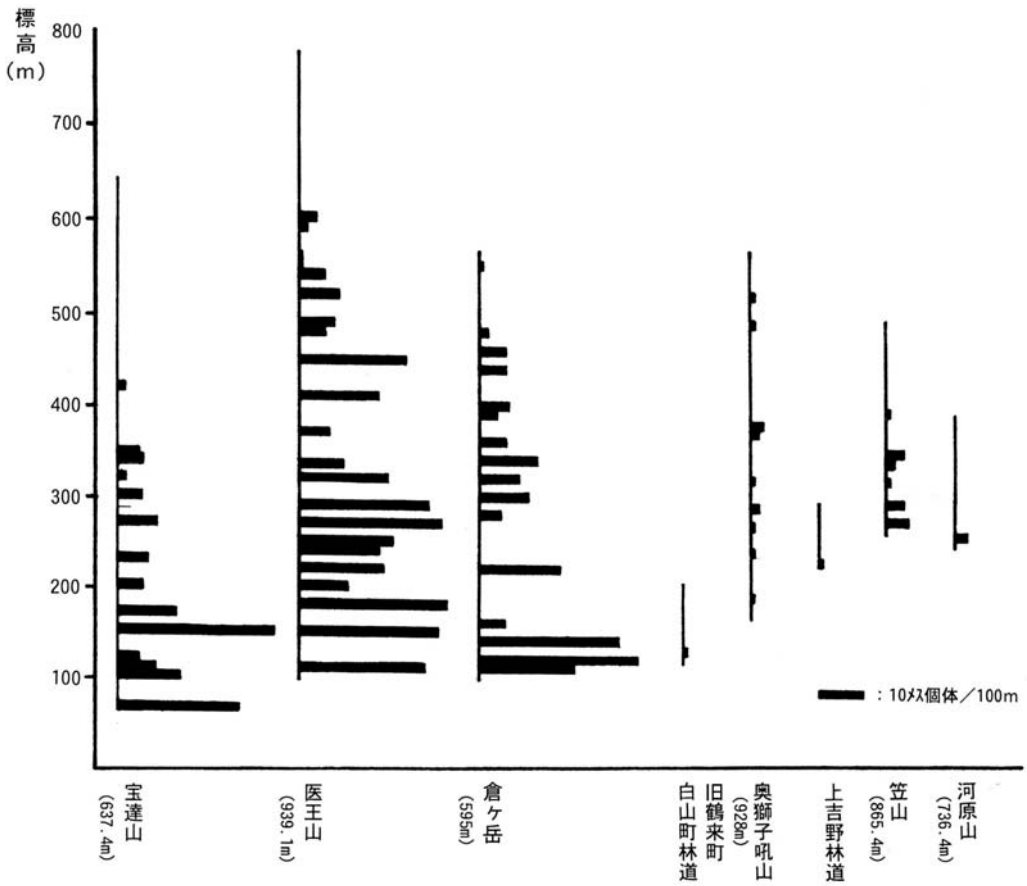


図３　白山麓から能登半島基部にかけての山地におけるジョロウグモの標高別分布
各山の縦線は調査区間を示す。各標高での道路長 100m の間の道路片側 5m 以内の個体数

た計算法で推定すると、１月の月平均気温では－1.5～－0.6℃ほど、年平均気温では 11℃前後であることがわかっています。そして前記した手取川ダム堰堤観察地点ではこれがそれぞれ－1.2℃と 11.0℃ほどです。また旧白峰村風嵐（白山国立公園入口）ではそれぞれが－1.3℃と 10.7℃ほどと考えられるので、ごく単純に考えるとジョロウグモが風嵐に達するにはこのクモが現在持っている耐寒能力をさら少しに増すか、風嵐の１月の平均気温が少なくとも－0.6℃ほどにまで上昇するかのいずれかが起こることが必要となります。そして実際には前に述べたような谷地形による分布抑制力がこのような谷奥ではさらに強まるでしょうから、これにかなり上のせした数値が必要でしょう。

また、同一種のクモであっても各地域によって耐寒能力が異なることが知られています。耐寒能力は遺伝的なものですから、50 年、100 年という短期間での耐寒能力が向上するのは無理でしょう。従って、ジョロウグモが白山に向かって進出するには、予想される 50 年後、100 年後の気温上昇の方が役立つ可能性が高いといえそうです。

ところで地球の気候温暖化シナリオによると年平均気温は 2050～2059 年には 2.4～2.7℃上昇、2090～2100 年には 5.6～6.1℃上昇すると予測されています。これはあくまでも世界規模の年平均値であって、各地での変動の数値はそれぞれの土地ごとにこの値とは異なるでしょう。影響の現れ方は当然土地ごとに異なるからです。もしこの予測が当たったとしたら（手取川ダム湖周辺ではどんな値をとるのかはわかりませんが）、50～100 年後レベルのことを考えると、ジョロウグモが手取湖沿岸に進出し、さらに風嵐か市ノ瀬周辺にまで達しているかもしれません。気温上昇による白山の高山生態系の消失が心配されていますが、もっと麓でもいろいろな変化が起こるにちがいなく、そうした方面も今から十分に気をつけていることが必要です。

＜石川むしの会＞

白山麓白峰の昔話の伝承
ーことばと語り手ー

新田　哲夫

白峰の自然環境と言葉

白山麓の白峰は、石川県の一番南の山間に位置する地域です。現在は手取川ダムの完成にともなってりっぱな幹線道路ができ、この山村に行くのには何の苦労もなくなりました。しかし、昔は山奥の厳しい自然環境が人々のひんぱんな交流をはばんでいました。特に積雪のある 12 月から 4 月までは、村は全く孤立していました。豪雪時に白峰で急病人が出ると、鶴来の町までソリで運んだということです。

また、昔の婚姻はほとんどが村の中か、その近郊どうしで行われました。外部の人が村内に移り住むことは今よりずっと少なかったわけです。

白峰では、このような自然・社会環境のせいで、現代語では失われた昔のことばが多く残されました。また一方で、白峰独自で変化した特徴もあり、周りの方言とは著しく異なる特徴をもつに至りました。地理的に連続していても、ことばの特徴の面で周りの地域から孤立し、あたかも絶海の孤島のような様子をみせる地帯を「言語の島」と呼ぶことがありますが、まさに白峰はそれに該当する地域なのです。

さて、ある地域の生きたことばに触れるためには、地元の人どうしが話す自然談話を聞くのがよい方法ですが、その土地の昔話を聞いたり読んだりする方法もあります。昔話には、命令・依頼・勧誘の表現やいろんな敬語、罵(ののし)りことばなど、自然談話では表れにくい表現が豊富です。

この白峰にも大変興味深い、内容の豊かな昔話が残されています。いえ、残されていました、というべきかもしれません。今回はその事情について、ちょっとお話しようと思います。

白峰の昔話集

白峰の昔話の記録に本格的に着手されたのは、山下久男さんという加賀市の方です。昭和 11 年（1936）8 月に白峰在住の山下はつさん（当時 63 歳）に出会い、そこで 20 話の話を聞いています。それらは全国昔話資料集成 19 として出された『加賀昔話集』（昭和 50 年、岩崎美術社）で読むことができます。ここには白峰の昔話が 17 話収められています。

もう一つの重要なものは、民俗学者小倉学さんと山下鉱次郎さんの共著、『白山山麓白峰の民話』（昭和 38 年、石川県図書館協会）でありましょう。著者の一人の山下鉱次郎さんは白峰で生まれ、地元で教員をしていました。先にあげた山下はつさんの息子さんにあたります。この本には、母親のはつさんはじめ、父親の兵四郎さん、その兄弟の小次郎さん、また、鉱次郎さんの祖母のたまさん、はつさんの父親織田才次

郎さん、その妹のきくさんなどから聞いた話がまとめられています。この本には合計で 62 話（細かい小話も数えると 72 話）が収められています。後にこの本は増補され、小倉学編著『白山麓昔話集』（昭和 49 年、岩崎美術社）として出版されています。

『白山山麓白峰の民話』の方言学的な価値

いくつかの他の地域の昔話集を見ていますと、私の専門の言語学・方言学の立場から見て、そこで使われていることばについて、もう少し配慮があればと思うようなものが少なくありません。その土地の大切な文化財産である方言が軽んじられ、単に田舎臭さを加えるためだけに恣意的に使われたり、そこの土地の方言ではないものを勝手に持ち込んだりすることもあります。これはまったくいただけないことです。

その土地のことばをうまく使っている昔話集も多くあります。しかし、完璧なものはそう多くありません。例えば、方言学からみると「～しよう」と「～しょう」の区別は日本語史上、意味がありますし、実際は「酒飲んだ」と語っているのに「酒を飲んだ」と書いてしまうのは、助詞の「を」を省略するという重要な方言特徴を見過ごしたことになるのです。方言のありのままの姿を忠実に記述している資料はきわめて少ないのが現状です。

その点、この『白山山麓白峰の民話』は民俗学の資料としてだけでなく、方言学の資料としても第一級のものです。私は白峰方言の調査を長年行ってきたことから、これらの昔話で用いられている白峰方言は、極めて正確でまじりっけのないものと確信しました。おそらく、話の文字化に際しては、白峰生まれの鉱次郎さんの手が入ったのではないかと思います。

「唐からきたテンポつき」という話から一部引用してみましょう。日本と唐（現在の中国）の間でほら吹き比べをしていて、日本にいるテンポつき（ほら吹き）を何とか困らせようとした唐の衆が三つのなぞをかけます。その一つ、「灰の縄をどうやって作るか」のなぞを、ある爺サが解きます。

> 「…灰（ひゃあ）の縄くらいなんでもないじゃわい。さきに赤土（あかづち）で小（ちい）しゃ釜こしらいちょいて、ワラで固（かあ）ちゃ太い縄をのうて釜の中へ入れ、蒸し焼きみたいにしると出来っちゃわい。それを壊さんようにソゥッととってこの中へ入れて送ろず。…」（『白山山麓白峰の民話』89 ページより）
> （訳：灰の縄くらいなんでもないんだよ。先に赤土で小さい釜を作っておいて、わらで固い太い縄をなって釜の中へ入れ、蒸し焼きのようにすると出来るんだよ。それを壊さないようにそっと取ってこの中へ入れて送ろう。）

まず、ひゃあ（灰）、ちいしゃ（小さい）、かあちゃ（固い）など標準語とちがう言い方が見られます。標準語ではハイ、チイサイ、カタイの語は語末に ai という母音の連続をもっています。これらは、白峰ではヒャ、シャ、チャの音になるのです。「固い」を「かあちゃ」というなど、形容詞の頭を長く延ばすのも白峰独特の言い方です。「こしらいちょいて」は「こしらえておいて」が変化したものです。「太い縄をのうて」とは、「綯って」で、「買って」を「こうて」と発音することと並行的です。「出来っちゃわい」は「出来る＋じゃ＋わい」からできたもので、「出来るんだよ」という意味になります。

「送ろず」の例は日本語の歴史上、とても重要なことを示しています。これは古語「送らうず」が由来で、この「うず」は室町末期の中央語（京都を中心としたことば）で盛んに用いられていました。当時「送ローズ」のように長く言っていましたが、白峰では短く「送ろず」となりました。

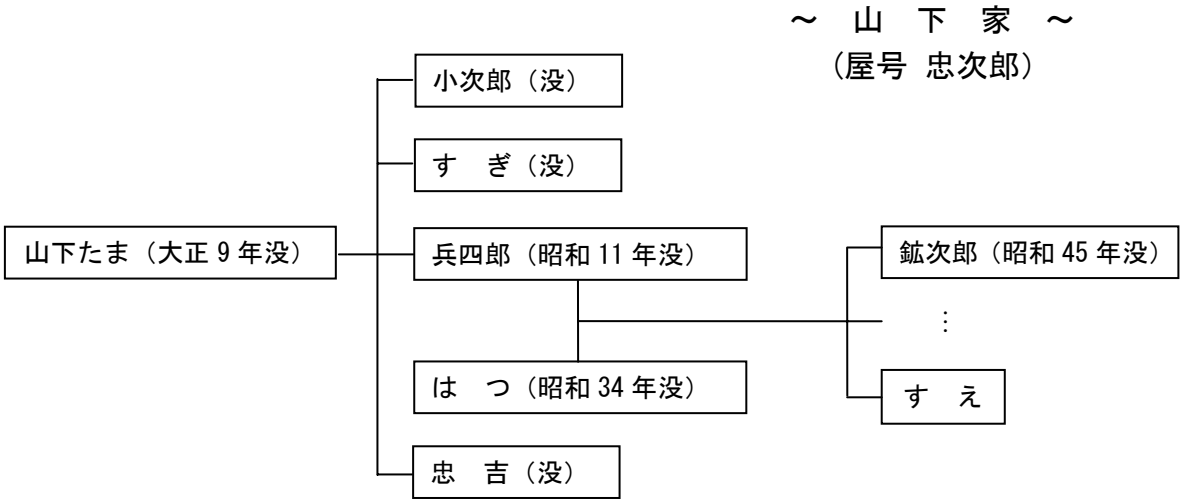
次にあげるものは1592年に出版された『天草版平家物語』に見える「うず」の例で、おおよそ「ウシノーズ」に近い発音がなされていました。『天草版平家物語』では「うず」が619例も見られます。

「この文、関東に見えば人も失なうず」（この手紙が関東（鎌倉）に露見すれば、人の命も失われるだろう）―――『天草版平家物語』

しかし、近世に入ってから、「うず」は中央語の舞台からこつぜんと姿を消してしまいます。方言に古語が残ると昔から言われていますが、この「うず」が方言に残っているとはっきり言えるのは、白峰と信州の秘境秋山郷に報告があるだけです。しかも秋山郷の「うず」はすでに消滅していると推定されていますので、この「うず」が保存され、現在も使用されているのは全国で白峰だけといえます。日本語の古い姿を伝える“重要文化財”と言えるものでしょう。

語り手をもとめて

私は、こうした白峰の昔話を一度、なまで聞いてみたいと思い、話のできる語り手がいないか村の人に聞いて回りました。すると、織田すえさんという方がいらっしゃるということがわかりました。そして、織田すえさんほど巧みにお話ができる人は他にいないということでした。実は織田すえさんは、さきにあげた山下はつさんの娘、また山下鉱次郎さんの妹にあたる方でした。



白峰の山下家は代々昔話を伝える家系で、鉱次郎さんご自身、そして両親、兄弟、祖母が語り手となって伝承されてきました。この家族のなかで育ったすえさんは、大正4年（1915）のお生まれです（ガニヤマという場所にあった出作りの家で生まれたので、出生届けが遅れ、大正3年が正確な年のようです）。

私がすえさんと初めてお会いしたのは、平成16年（2004）9月でした。その年の夏までは、一人で白峰にお住まいでしたが、お会いしたときは健康上の理由で金沢市の息子さん夫婦とお暮らしでした。これまで2回お会いして10話ほどの話と三つの遊び歌を記録しました。

すえさんが私どもに語ってくださった昔話は、兄の鉱次郎さんの記録と同一ではありません。語り手の頭の中にはその話の筋だけがあって、その肉付けはその場その場で作られるアドリブから成っています。これはまことに自然なあり方かと思われます。親から子へ、祖父母から孫へ語られ

る本来の昔話は、同一人が語る同一話でも、一言一句同じものはなく、その都度細かい所はちがっているのが普通です。

郷土の昔話を大切に保存するために、全国で「昔話を語る会」が作られ、活動している団体は多くあります。昔話を残す活動はとても価値のあるものだと思います。しかし、語られる話が一字一句違わず暗記した台詞を言うようでしたら、それは家庭内・村のうちで継承されてきたものとは別のものといえるでしょう。外部の人にもわかりやすくしようと、生き生きした地元の語法や普段の音声を変えてしまっては、昔話の持ち味が半減されてしまいます。それだけに昔話の“原型”を留めているすえさんの語りは貴重なものと言えます。

最後の語り手

織田すえさんは白峰民話の最後の語り手です。白峰に伝わる昔話を知っている人はまだたくさんいらっしゃいますが、それを語るパフォーマンスができる人は他にはいません。すえさんの語る話は、相手が知っていることから話題を起こし、聞いている者はいつの間にか昔話の世界に引き込まれてしまいます。狐やムジナにだまされた人は本当に存在するし、話に出てくる愚か者、賢い者、子どももかつての白峰に実在した人物として語られます。最初から、これは作り話なんだが、という前提ではないのです。

しかしながら、織田すえさんは平成 17 年 7 月 3 日にお亡くなりになりました。これで、白峰民話の正統な継承者がいなくなったことになります。もう白峰の昔話を古い自然なことばで聞けなくなってしまいました。ほんとうに残念なことです。白峰の外の人間である私ができることは、記録した映像・音声をきちんとしたかたちで、文字化し注釈をつけて公にし、保存に協力することです。

白山ろく民俗資料館の山口一男館長は、織田すえさんの死を「博物館がひとつ無くなったのと同じ」と表現されました。まさにそのとおりだと思います。最後の訪問の別れ際、「またゴザレヨ（いらっしゃい)」といってくれたすえさんの声が今も耳に残っています。合掌。

＜金沢大学文学部＞

織田すえさん（1915－2005）
2004 年 11 月撮影

白山外来植物除去作戦

－ボランティアによる「白山外来植物除去作業」－

野上　達也

白山に侵入した外来植物への対策

シロツメクサ

オオバコ

フキ

スズメノカタビラ

白山高山帯保全対策調査で、白山に本来生育しているはずのないシロツメクサ、オオバコ、フキ、スズメノカタビラの４種類の低地性植物の分布状況について調査が行われ、調査の結果は白山高山帯保全対策調査報告書としてまとめられました。その一部については普及誌「はくさん」第32巻第1号で紹介されています。さらに有識者からなる白山高山帯保全対策検討会（座長：菅沼孝之　元奈良女子大学教授）を開催し、白山高山帯保全対策指針が出されました。

白山高山帯保全対策指針を受け、石川県では「白山外来植物対策事業」を実施することになりました。外来植物というと、外国から入ってきた植物のようですが、ここでは本来そこにないはずの植物ということで、白山に侵入した低地性植物も外来植物としています。事業内容は、対策を要する外来植物の除去作業を実施するほか、ＤＮＡレベルでの移入植物の影響調査や山地帯において林道工事などに伴い侵入した外来植物の実態を把握するための調査を行います。今回はボランティアの協力を得て行った外来植物の除去作業の結果について紹介します。

白山で初めて行われた外来植物除去

尾瀬や上高地などではすでにオオバコなどの除去が行われています。特に尾瀬での取り組みは早く、昭和 59 年（1984）ごろから除去が始められています。白山ではこれまでこのような外来植物の除去は行われてきませんでした。今回の事業が白山では初めての除去作業となります。

その記念すべき最初の除去作業は、室堂（標高 2,450m）において平成 16 年（2004）10 月 2 日（土）～ 3 日（日）に実施しました。作業は、白山の夏山で自然解説活動を実施している石川県自然解説員研究会の方にお願いをしました。当日は天候も悪く、手がかじかむような寒い中での除去作業となりましたが、参加者は、黙々とスズメノカタビラの除去を行い、15.3kgを除去することが出来ました。そして開催時期や植物除去の用具などについて様々な改善点を指摘していただきました。

南竜ヶ馬場での除去作業

平成 17 年度からは一般の方を対象にボランティアを募集し、本格的に外来植物除去作業を開始し

ました。平成 17 年度第 1 回目は、南竜ヶ馬場周辺（標高約 2,000m前後）の南竜山荘、南竜ビジターセンター周辺のオオバコとシロツメクサについて、特にオオバコに重点を置いて実施しました。日時は平成 17 年 9 月 3 日（土）～4 日（日）、参加者は 32 名でした。

除去は土壌保全のため、オオバコは地上部のみをカマ等で切り取って除去することにしました。根まで掘り返してしまうと、掘り返した土が雨水などで流れ出してしまい荒れてしまうので、それを防ごうと考えました。オオバコが芽を出す成長点と呼ばれる部分は、地表面のほんのすぐ下のところですので、その下で切ってしまえば翌年は、芽は出さないと考えたからです。

除去作業時にはゼッケンをして、許可を受けて作業を実施していることが他の登山者にもわかるようにしました。白山国立公園内では低地性の植物の除去でも環境省及び土地所有者（白山比咩神社）の許可が必要です。ボランティアの方々はせっせとオオバコの地上部を刈り取っていき、あっという間に除去した植物を入れるゴミ袋がいっぱいになっていきました。

また、白山に本来生育している高山植物であるハクサンオオバコを観察するとともに、南竜キャンプ場では、オオバコとハクサンオオバコが隣り合って生育している様子を観察しました。これらの 2 種の間で雑種ができるかどうかについては非常に大きな問題ですが、このことについては現在、大阪府立大の中山先生らとともにＤＮＡレベルでの調査を実施しているところです。

南竜ヶ馬場でのオオバコ、シロツメクサ除去作業参加者

オオバコの除去作業

南竜キャンプ場での「オオバコ」と「ハクサンオオバコ」が隣り合って生息している様子の観察。右上写真の指差しているのが「オオバコ」、隣り合って「ハクサンオオバコ」が生育している。

2日目はシロツメクサの除去も行いました。シロツメクサは地下に細長い茎を出して広がっています。完全に除去するためには、地下部の茎も引き抜かなければなりません。幸いシロツメクサはオオバコと違い南竜ヶ馬場ではその分布範囲も個体数も限られていましたので、地下部の茎も引き抜くことにしました。ボランティアの方々は長く張った茎を取り除くのに大変苦労していました。除去した植物は、ボランティアの方々がそれぞれ背負い、登山口の別当出合まで運んでいただきました。2 日間、約 2 時間半の作業で、45Ｌのゴミ袋（家庭用の大きなゴ

室堂でのスズメノカタビラ除去作業参加者

スズメノカタビラの除去作業の様子

ミ袋）にして 19 袋、約 90kgものオオバコと約 1.2kgのシロツメクサを除去しました。

室堂での除去作業

平成 17 年 9 月 17 日（土）～ 18 日（日）には平成 17 年度第 2 回目となる除去作業を実施しました。場所、対象植物は、室堂（標高 2,450m）の室堂センターなどの建物周辺のスズメノカタビラで、参加者は 28 名でした。中には遠く岐阜県や福井県、さらには奈良県からの参加者もいらっしゃって、白山の自然を守ろうとする方が本当に多くいらっしゃると感じました。

参加者の中にはスズメノカタビラについて知らなかった方も多かったのですが、実際に実物を見ると、庭や畑で普通に見かけている植物だと分かっていただけました。今回のスズメノカタビラの除去もオオバコと同様に土壌を保全するために地上部のみを切除することにしました。スズメノカタビラは芽を出したその年（秋に芽を出した場合は翌年に）に花を咲かせ、実を着け、枯れてしまう 1 年草ですので、地上部を切り取ってしまえば、翌年芽を出すことはありません。

除去作業は腰をかがめての作業で、たいへんな苦労を伴うものでしたが、ボランティアの方々はせっせとスズメノカタビラの地上部を刈り取っていきました。2 日間、約 4 時間の作業で、45Ｌのゴミ袋 4 袋、約 19.2kgのスズメノカタビラを除去することが出来ました。

参加者からの意見（一部）

- こういう機会を年 1 回だけでなくて、2 回、3 回と増やしてほしいと思う。（20 代、男性）
- 私にとって初めての体験でしたが、大好きな白山のためにできることがあって嬉しかったです。このような行事は継続してこそ意義があると思います。（60 代、性別不明）
- 参加しているのは限られた一部の人が多いと感じました。いろいろな人が参加できるように周知、広報の方法を検討してみては。（40 代、男性）
- 運搬のみを行うボランティアも必要。もう少し若い方にも参加してもらいたい。（50 代、男性）

今回の作業は、白山市、白山比咩神社、（財）白山観光協会、石川県自然解説員研究会、そして参加者の方の多大な協力を得て実施されたもので、あらためてお礼を申し上げたいと思います。しかし、今回 100kgを超える量の低地性植物を除去したわけですが、まだまだ数多くの低地性植物が生育しています。石川県では今後とも、これらの植物の除去作業を実施していかねばならないと考えており、平成 18 年度も除去作業を実施しますので、多くの方が参加していただければと思います。

＜白山自然保護センター＞

ブナオ山観察舎のキャラクター・かもちゃん

冬の野生に会いに来て
ブナオ山観察舎がオープン

ブナオ山観察舎

ニホンザル

イヌワシ

ニホンカモシカ

観察舎内から望遠鏡で野生動物を探す

白山市一里野のブナオ山観察舎は今季も 11 月 20 日にオープンしました。年末年始を除いて来年 5 月 5 日まで毎日開館しています。ニホンカモシカ、ニホンザル、イヌワシ、クマタカなど、厳冬を生きる野生動物を観察してみましょう。

観察の本番は動物が見やすくなる積雪後ですが、11～12 月の晴れた日はイヌワシのつがいの飛翔が見ものです。

観察舎内には大型双眼鏡や望遠鏡を備えてあり、どなたでも観察を楽しめます。

ミニ観察会も実施

かんじきをはいて雪の森を歩くミニ観察会も実施しています。野生動物を見つけたり、雪の様々な表情を観察したりします。12～4 月の土、日、祝日の午前 10 時から午後 3 時までの間に 1～2 時間。観察舎職員がご案内します。

団体の場合は事前に申し込んで下さい。

参加者募集

白山まるごと体験教室

かんじきハイキング

かんじきをはいて雪の降り積もった森を歩き、動物やその足跡などを探します。無雪期とは違った冬ならではの自然を体感してみましょう。

日程：平成 18 年 2 月19日（日）10:00～15:00
会場：白山市一里野・ブナオ山観察舎
定員：30 名
対象：子ども（小学生以上）～大人
参加費：無料
申し込み・問合せ：電話で白山自然保護センター（0761-95-5321）まで。１か月前から受付、定員に達し次第締め切ります。

市ノ瀬ビジターセンターのキャラクター・チブリ

「川の赤ちゃん」を探そう

白山自然ガイドボランティア

市ノ瀬で小学生に野外授業

白山自然保護センターの市ノ瀬ビジターセンター（白山市白峰）と中宮展示館（同市中宮）では今シーズンも白山自然ガイドボランティアの皆さんの協力で、土曜、日曜、祝日に周辺の自然を観察するガイドウォークを実施してきました。事前に申込みのあった団体には平日でも対応し、皆様の要望にお答えしています。

10月13日には金沢市米泉小学校の5年生52人が川の始まりについて勉強するため、市ノ瀬ビジターセンターを訪れました。ガイドボランティアら3名が案内し、近くの河原で「川の赤ちゃん」をテーマに“野外授業”を行いました。児童たちに川の赤ちゃんを探してもらい、川がどこから産まれ、どんな働きをしているかを、イラストを使って一緒に考えました。

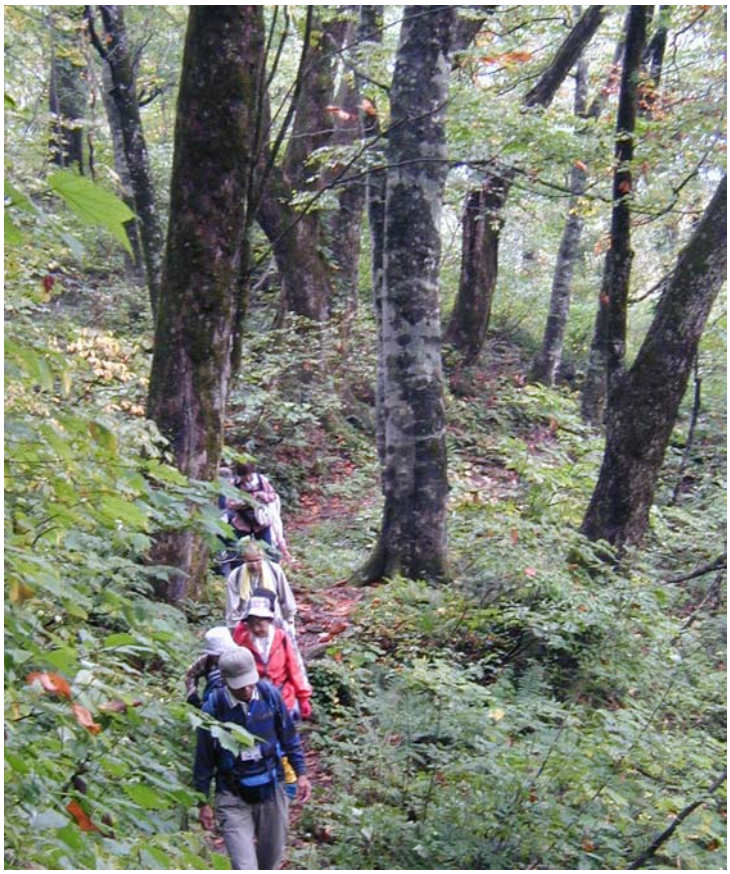
ボランティアの指導で川について考える子どもたち

「川の赤ちゃんを見つけた」。がけからしみ出す水を小びんに集める

河原でいただくお弁当はとってもおいしいよ

ブナの実、食べた！

紅葉のブナ原生林
市ノ瀬ビジターセンター



ブナやトチノキの大木の森を進む参加者

白山まるごと体験教室

「紅葉のブナ原生林」は 10 月 16 日、白山市白峰の市ノ瀬ビジターセンターで 32 人が参加して行われ、チブリ尾根の登山道を標高 1,260mの水場まで往復しました。

紅葉の盛りには少し早かったのですが、豊作のブナの実が登山道にたくさん落ちていたほか、各種草木の赤い実、いろいろのキノコも多く見られ、色付きはじめた原生林を体感しました。森に入る前にクイズを行い、あらかじめ用意したブナの実などの試食も楽しみました。

「結構うまいね！」。ブナの実を試食する参加者

県民白山講座

万年雪も消滅？

白山と温暖化
石川県立生涯学習センター

「白山と温暖化」は 10 月 30 日、金沢市の県立生涯学習センターで開かれ＝**写真**＝、近年の地球温暖化への関心の高まりを反映してか、予想を上回る 62 名が参加しました。

まず国立環境研究所の名取俊樹主任研究員が「日本の高山帯と温暖化の影響」と題して講演しました。この後、県白山自然保護センターの小川弘司専門研究員、野上達也課主査、林哲主任研究員が白山の雪渓、植物、動物と温暖化の影響について、それぞれ研究発表しました。万年雪で知られる白山・千蛇ヶ池の雪渓も「このまま温暖化が進めば消滅する可能性がある」などの報告がなされ、参加者は白山の自然と温暖化について理解を深めました。

＜編集・谷野　一道＞

センターの動き（10 月 21 日～12 月 20 日）

10.23	石川の森づくり推進協会案内	（市ノ瀬）
10.25	特定鳥獣保護管理計画検討会	（金沢市）
10.30	県民白山講座「白山と温暖化」	（金沢市）
11. 5	市ノ瀬ビジターセンター冬季閉館	（市ノ瀬）
11. 6	いしかわ自然学校まつり in 夕日寺 2005	（金沢市）
11. 8	石川県博物館協議会実務担当者会議	（七尾市）
11.10	中宮展示館冬季閉館	（中宮）
11.11	カモシカ通常調査事業に係る調査会議	（金沢市）
11.19-20	野生生物保護学会	（野々市町）
11.20	ブナオ山観察舎開館	（一里野）
11.22	里山荒廃がクマに与える環境影響調査第 2 回検討会	（金沢市）
11.29-30	第 8 回自然系調査研究機関連絡会議	（大阪市）
12.11	白山自然ガイドボランティア研修講座第 3 回	（本庁舎）
12.14-16	白山麓の里地里山における人文環境と生態系モニタリング調査中間報告	（富士吉田市）
12.15	環境に関する知的資産整備・活用システムワーキング委員会	（金沢市）

編集後記

本号では、徳本洋さんにジョロウグモの個体数変動について報告していただきました。生物の異常発生は、最近よく聞く話題です。日本海のエチゼンクラゲ、白山麓ではナラ枯れの原因とされるカシノナガキクイムシなど。このような変動を聞くと、私などはついつい今話題の地球温暖化の影響に結び付けて考えてしまいます。皆さんもそのようなことはありませんか。ですが徳本さんも指摘されていますが、そのような安易な考えはよいことではありません。気をつけなければならないと思いました。

また、新田哲弘さんには白山麓白峰言葉の独自性やその言葉の伝承のために意義のあった語り手の存在について報告していただきました。白峰には白峰民話を伝える語り手の家が存在し、それが代々受け継がれていたと言うことは興味がもたれることです。その風習が今まで残っていたことに、感動を覚えました。

最後に当センターの野上課主査が、白山での外来植物の除去作業について報告しました。私も職員のひとりとして南竜ヶ馬場での除去作業に参加しました。オオバコが山荘周辺やキャンプ場に繁茂している姿には驚きを感じざるをえませんでしたが、それをわざわざ山へ登り、黙々と除去作業をするボランティアの皆さんの姿には、大変感心しました。

今年は早くから雪が降りはじめ根雪となりました。例年見慣れた雪景色ですが、降り始めの頃は、ついつい見とれてしまいます。（小川）

目　次

表紙　赤兎山からの白山……上馬　康生 … 1
ジョロウグモは白山に登れるか……徳本　洋 … 2
白山麓白峰の昔話の伝承－ことばと語り手－……新田　哲夫 … 6
白山外来植物除去作戦－ボランティアによる「白山外来植物除去作業」－ ……野上　達也 …10
はくさん　山のまなび舎だより……谷野　一道 …13

はくさん　第 33 巻　第 3 号（通巻 137 号）

発 行 日　2005 年 12 月 20 日（年 4 回発行）
編集発行　石川県白山自然保護センター
〒920-2326　石川県白山市木滑ヌ 4
TEL. 0761-95-5321　FAX. 0761-95-5323
URL　http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/
E-mail　hakusan@pref.ishikawa.jp
印 刷 所　前田印刷株式会社